寄稿

鳥の目・虫の目・魚の目 そして自分の目

― 全国につながる連携の輪 ―

木佐貫 篤
宮崎県立日南病院
患者支援センター長

地域医療連携部門に関わるようになったきっかけはなんですか。

「連携業務は当院の経営には重要だから、明日から地域連携室に異動ですよろしく」とか「退院支援が大事なので、退院支援部門で支援業務をお願いします」とか、言われて配属された人がほとんどでしょうか。

地域医療連携部門が始まった2000年代前半とは異なり、最近では大きな医療機関では入院支援、退院支援、患者相談支援、地域連携事務、という4つの業務をまとめてセンターとして運用するところも多くなりました。手探りで業務を行っていた初期とは異なり、今は各業務がほぼマニュアル化されており、業務初心者でも比較的早く業務に慣れることができるのではないでしょうか。

その業務が病院にとって必要なのか、よく考えてみたことがあるでしょうか。

退院支援／入院支援業務そのものに精一杯で、その本質や意味を考えることがなかなか出来ていないかもしれません。

患者さんがスムーズに入院し退院していくいわゆるPFM（Patient Flow Management）は、在院日数や在宅復帰率、さらには診療報酬ともつながり病院経営に深く関わってきます。病院の地域における役割は都道府県地域医療計画のなかのいわゆる5疾病6事業のなかで位置づけられており、それは2025年・2040年を意識した地域医療構想ともつながっています。

さらにそれらの計画は少子高齢化がすすむという日本の将来において、医療介護をどのように維持して行くのか、というところまでつながっていきます。

「鳥の目・虫の目・魚の目」をもとう

わたしたちは目の前にいる患者さんひとりひとりに退院支援や紹介状管理というかたちで関わっています。それらは「虫の目」の視点といえるでしょう。

そういった具体的な日々の仕事は、医療計画や地域医療構想、病院の中長期事業計画、さらには地域の将来デザインにつながっています。全体を俯瞰する視点「鳥の目」をもってそれらの意味を理解することも必要です。

さらに2025年を目標とする地域包括ケアシステムの実践、その先の人口減少が待ち構える2040年という時間の流れのなかでの動きをつかむ視点「魚の目」も持ちたいものです。

医療連携部門の業務は、そういった3つの目の視点をもつことで、理解が深まりより本質に近づくことが出来ると考えます。

そして物事をしっかりと捉えて理解する「自分の目」もしっかり持ちたいものです。「鳥の目・虫の目・魚の目そして自分の目」をもつことでこれからの時代を乗り越えていきましょう。